

「ウッドマイレージ」とは？

イギリスの消費者運動家ティム・ラング氏が提唱した「フードマイレージ」を木材に応用した指標であり、木材の量と木材の産地と消費地までの輸送距離を乗じたものである。日本の木材に対する自給率は18.2%と低く、南米、アフリカ、欧州、オセアニアといった、8000キロメートル以上離れた輸出国から輸入する割合が40%と非常に高い。結果として日本のウッドマイレージは384億キロメートルで、米国の4.6倍、ドイツの21倍にもなる。輸送過程に発生する二酸化炭素排出量（ウッドマイレージCO2）や、膨大なグリーン消費量は自然環境に大きな影響を及ぼしている。

林業を主産業とする私の町の暮らし。

計画地は、近年まで滋賀県で唯一の「村」だった朽木村。2005年1月1日、同郡内で合併して高島市となった。朽木地域の人口は2200人程度で、地域の子供たちのほとんどは、私と同じ安曇川高校に進学しています。面積の93%が森林である朽木地域では、昔から林業が主産業であったことはよく知られています。平安時代の書物にも記されており、東大寺をはじめとする仏教寺院建築用の木材を切り出した有名な地域であったようです。朽木地域では、木材を切り出し、後で運搬するだけの産業だけではなく、「炭焼き」や「ホトヲ刈り」（広葉樹の若木を刈り取り、牛小屋の敷き草として利用後、尿床を吸いこんだ草を堆肥として再利用すること）などの山を中心とした地域の生活が50年ほど前からできんに行われていました。

滋賀県の造林公社が破綻して社会問題となっています。

高度経済成長期、全国的に木材需要がひびくにつれ、日本各地では、成長の早いスギやヒノキなどの針葉樹の拡大造林が積極的に進められました。また、輸入木材の全品目を自由化し、木材需要に対応しようとした。しかし、安価な外国の木材が大量に輸入されるようになると、割高な日本の木材は売れなくなり、近年、滋賀県の造林公社の債務残高は1,057億円に達して破綻しました。

人の手が入ることで生きている山や森。

古くより日本人は「里山」や「雑木林」に代表されるように、自然と共に暮らしてきました。山や森は、人間による定期的な間伐や採集などのおかげで林の奥や根元に太陽の光が届くようになり、生態系豊かな健康な状態を保っていました。しかし、国内の林業の衰退と共に、人の手が入らなくなった多くの山や森は、荒れ果てて悲鳴を上げています。今回の計画案は、地元の木材を地元で消費する「地産地消」の取り組みから、受け継がれた地域の暮らし方や、人間と自然との共生方法や、本物の環境保護を「木」を通して考えました。

地産地消の取り組みが高い評価を受けました。

私たちの地域では、「学校林」という地域の学校が管理する森林があります。学校林とは、間伐や枝打ち、下草刈りなどを学習の一貫として学んでいます。この何世代にわたって育んできた「学校林」から木材を切り出し、その木材を使用して建設した地元の中小学校の体育館が昨年完成しました。「地域で育てた木々で孫たち次世代の体育館を」と住民参加で建設計画を練り上げ、地域の職人の技を生かしながら、伝統木造の「船形」の技術を取り入れた木造7階建ての体育館を持つ体育館です。「全国的にも珍しい「地産地消」型の取り組みが実を結んだ。」と高い評価を受けています。

変化に対応できる太い柱と太い梁。

木材は古くから建築材料に使用されており、数百年前の太い柱が現在でも役目を果たしている古寺や古民家などは少なくありません。木というものは、人の気持ちに添って、ずっと使い続けられることが出来る長寿材料です。太い柱や太い梁は、増築や改築や移築などに何度でも耐えることが出来るうえに、金属とは異なり、自由な場所に釘やボルトを設置することができます。また、加工をほどこし、大きな梁や間仕切りを取り付けることも可能です。太く大きな柱と梁を持つこの家は、家を大きくしたり、小さくしたりすることが、簡単にできるのです。増築や改築に十分に対応出来る「増築を続ける長屋」は、これから先も増え続ける大家族の要求に答えることが出来ます。



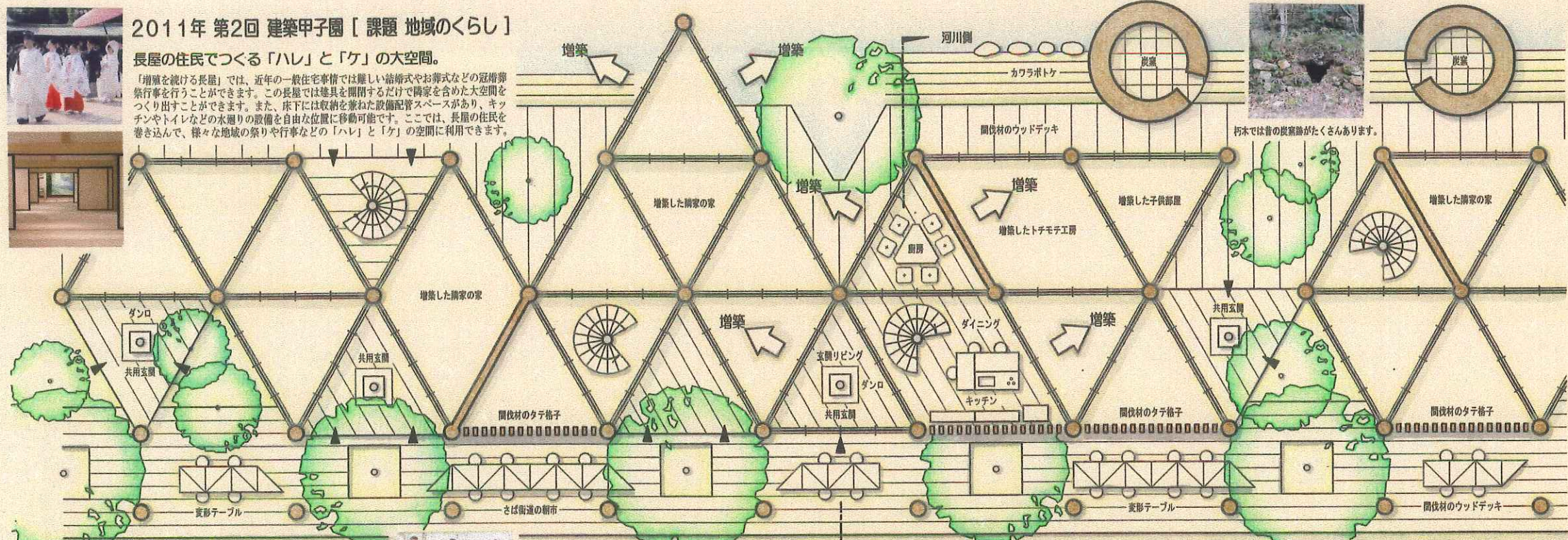
オショライ送りと、カワラボトケ。

朽木では、お盆になると川筋のあちらこちらに、石でつくられた地蔵のようなもの（カワラボトケ）があらわれます。それは一体であったり6体であったり、笠をかぶっていたり様々な形をしています。お盆の間川に供えてあった供物と一緒に、先祖の霊をあの世へ送る「精霊（しょうらい）送り」ののめにつくられるものです。お盆に朽木を訪れた人の中には「水難事故があったのか？」と尋ねる方もおられますが、これは朽木の夏の彩る風物詩なのです。

2011年 第2回 建築甲子園「課題 地域の暮らし」

長屋の住民でつくる「ハレ」と「ケ」の大空間。

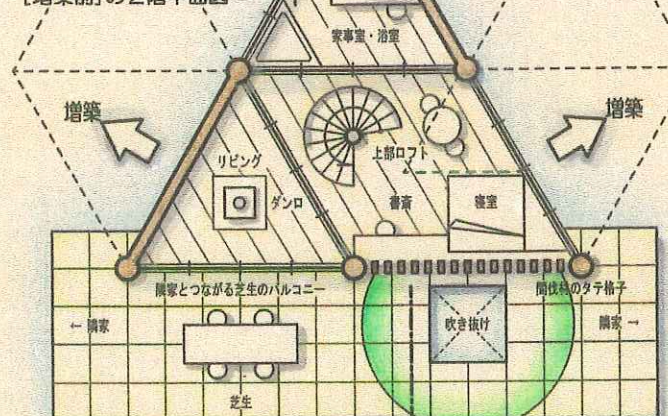
「増築を続ける長屋」では、近年の一般住宅事情では難しい結核式やお葬式などの冠婚葬祭行事を行うことができます。この長屋では道具を備えるだけで家を含めた大空間をつくり出すことができます。また、床下には収納を兼ねた設備スペースがあり、キッチンやトイレなどの水廻りの設備を自由な位置に移動可能です。ここでは、長屋の住民を巻き込んで、様々な地域の祭りや行事などの「ハレ」と「ケ」の空間に利用できます。



「鯖街道」と「朝市」

かつて「鯖街道」の宿場町として栄えた朽木村では、現在でも毎週日曜日に朝市が開かれて、にぎわいを見せています。出店は自分で生産、加工することが条件。村の特産品である「鯖のなれずし」と「餅（とちもち）」は、それぞれ味に工夫をこらした一品で、京阪神一帯の遠方から常連のお客さんが出かけてくるほどの人気を呼んでいます。

「増築前」の2階平面図



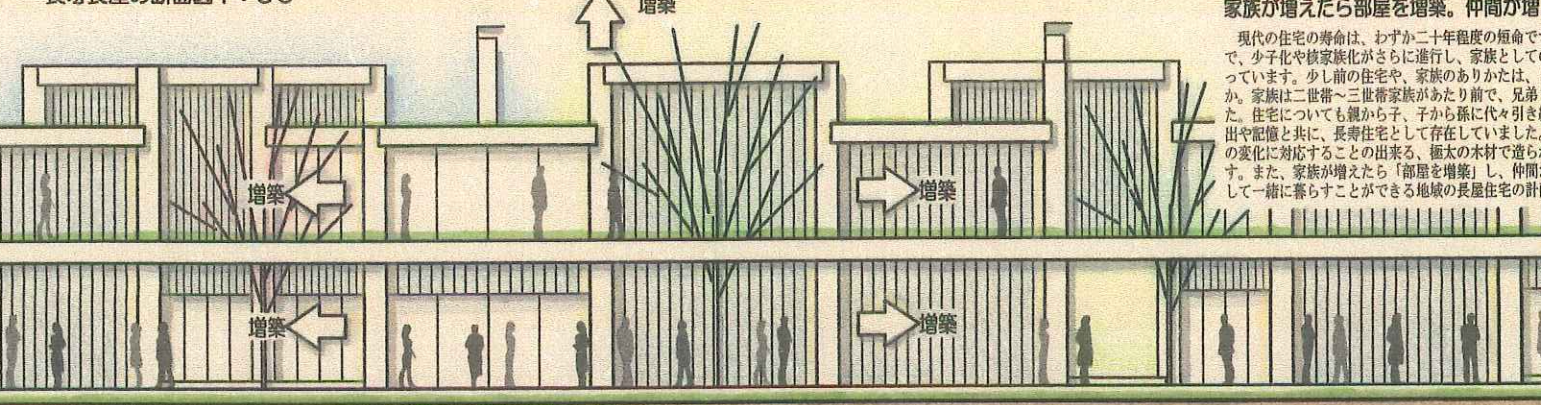
地域の祭り「銭と神様」

朽木には「シコブチ神社」という神社があります。これは、全国でも安曇川筋に鎮座している珍しい神社で、朽木に6社、安曇川に1社、あります。シコブチという字は「思子淵」「忍子淵」などと書き、川を下るいかだ乗りが悪さをする河童をシコブチ神がこらした昔話が伝えられています。シコブチ神は川の安全を守る神神様として、また、いかだ師の神様として古くから地域の人々に信仰されています。

祭りや筏下り



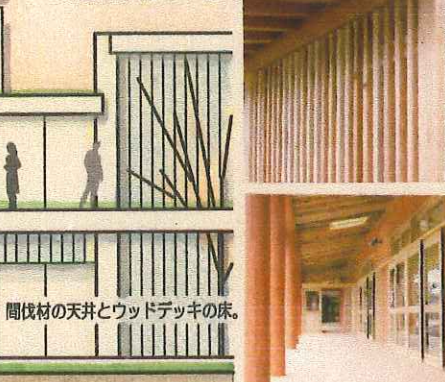
長寿長屋の断面図1:50



家族が増えたら部屋を増築。仲間が増えたら家を増築。

現代の住宅の寿命は、わずか二十年程度の短命です。人の暮らしも同じで、少子化や核家族化がさらに進行し、家族としての寿命が短くなっています。少子前の住宅や、家族のありかたは、どうだったのでしょうか。家族は二世帯～三世帯家族があたり前前で、兄弟も5、6人は当然でした。住宅についても親から子、子から孫に代々引き継がれ、住の傍の思い出や記憶と共に、長寿住宅として存在していました。今回の計画案は家族の変化に対応することの出来る、極太の木材で造られた長寿住宅の提案です。また、家族が増えたら「部屋を増築」し、仲間が増えたら「家を増築」して一緒に暮らすことのできる地域の長寿住宅の計画案です。

外壁は間伐材のタテ格子。



「増築後」の長屋立面図1:100

